

『阿婆縛抄』研究史稿

岡田 健太

『阿婆縛抄』は鎌倉時代に著された天台密教（以下台密と称する）における事相の集大成書である。秘伝を重んずる密教は、平安時代後期に入ってから諸流諸方の口伝などを集成する動きが出てくる。結果、真言密教（東密）では、院政期から鎌倉時代初期にかけて、諸流において『十巻抄』『別尊雜記』『覚禪鈔』などが編纂されるに至った。それに比べ、台密においてはこういった集成が意識されたとはいいがたく、これらに匹敵する『阿婆縛抄』の集成が鎌倉時代半ばに行われたことは特筆に値する。

『阿婆縛抄』の巻数については、『阿婆縛抄』序に含まれる承澄（一二〇五―一二八二）の「治定目錄」に記される「已上尊法百五十式作法等七十八都合二百二十八卷」をもって基本説と捉えられている。⁽¹⁾しかし、『大日本仏教全書』⁽²⁾本の巻末に載せる「阿婆縛抄総目并諸本存欠一覽」では二三三卷とするなど、⁽³⁾諸説行われてお

り、定説を見ない。その他、『密乗撰述目錄』『十八道所依記錄』⁽⁴⁾に、

阿婆縛抄 小川僧正承澄 二百卷

とあり、また、覚千（一七五六一―一八〇六）の『自在金剛集』⁽⁵⁾第八に、

穴 阿婆縛抄 二百卷 小川僧正承澄集尊澄治定

或云 二百二十七帳^ト

と伝えられているように、二百卷、あるいは二二七巻と見なす説や、『阿婆縛抄』序「当流代々書籍事」に、

阿婆縛抄 承澄僧正御記

忠快并諸師説^ヲ取合^テ記^シ玉フ。二百余巻有^レ之。

とあるように、二百余巻とされることもある。また、「治定目錄」そのものにもいくつか注意すべき点がある。「治定目錄」の成立は文永十二年（一二七五）であることが本奥書により知れ

るが、『阿婆縛抄』の編纂はこれ以降も続けられており、現行本と「治定目録」の間には異同が見られる。さらに「治定目録」には先述の二二八巻とする一文に続けて別の九巻も記されており、二二七巻とする説もある。これが最も浩瀚な場合となる。これら巻数の考察は、撰者の捉え方や『阿婆縛抄』の成立過程の問題と連繫している。

『阿婆縛抄』についての先行研究は少ない。『阿婆縛抄』は多く図像を収めており、それゆえ、『阿婆縛抄』の研究は美術研究の視点から進められてきた。多賀宗隼氏に「台密における唯一の図像集として特に高い価値を認められている」といわれること⁽⁶⁾から、切畑健氏⁽⁷⁾、宮島新一氏⁽⁸⁾の論考が提供されている程度であった。とはいえ、これらの研究は、基礎的事項のひとつである「撰者」について、新しい視点をもって再考している。

従来の説によると、撰者は古くから承澄と見なされてきた。

永和四年（一三七八）に編纂された『山門穴太流受法次第』「次口決事 二月五日」には、⁽⁹⁾

次ニ小川承澄僧正ノ御時。密談抄ノ上ニ息心行林等ヲ備ニ潤色ニ載テニ博覧ノオヲ一号ニ阿婆縛抄ト一給ヘリ。

と記されている。その説は近年になるまで踏襲されており、福田堯穎氏の『天台学概論』の中においても、⁽¹⁰⁾

忠快の資に小川僧正承澄あり、承澄は小川ノ御所に住せるを以て時人呼んで小川僧正と云ふ。此の頃より小川流の名がある。此の師は頗る博学多識にして忠快の密談抄を本として、法曼流の息心抄行林抄等を参酌し、阿婆縛抄二百巻を著す。此の書は台東二密家に於て数多の書籍あるも、本書の如く完備したものは無い。

と記述されている。

承澄の伝については切畑氏の論考に詳しい。『阿婆縛抄』巻第二二七「三国明匠略記」に、

小川僧正。極楽房。松殿殿下師家公御息。御母儀ハ平大納言時忠御女云々穴太一流御再興也。仍今小川御流トモ可レ云也。御德行記別紙有レ之云々十一歳御出家云々弘安五年十月二十二日。七十八御入滅云々

とあり、また、『阿婆縛抄』序「当流代々書籍事」の「山門真言三流事」に、

忠快御弟子承澄僧正也。小川僧正ト申ハ是也。常ニ小川殿ト申ハ此承澄御事也。承一（澄）ハ本ハ持明院覚審御弟子也。覚審ハ法曼流人ニテ御座也。承澄僧正後忠快ニ御受法アリ。当流祖師ト成給也。忠快御弟子大藏卿僧正良信ト申人御座。然トモ承澄猶勝^{玉ヘル}故付弟ニ成^{玉フ}也。

と記されている。同じく『阿婆縛抄』序「当流代々書籍事」の「山門真言三流事」には、

小川僧正

承澄 松殿々下師家公息。西林院座主承円僧正入室。

八歳出家受戒。相従模イ 覚審大僧都法万流。忠

快法印穴太流審受法灌頂

とも伝えられている。

これらの記述によると、承澄は弘安五年（一二八二）十月二十日、七十八歳をもって没した。とすると出生は元久二年（一二〇五）である。『尊卑分脈』によると、父は天王寺殿ともよばれた藤原師家で、その第四子であったことが知られる。承澄は、初め西林院座主承円僧正に入室し、八歳のとき（一二一三）出家（『三国明匠略記』では十一歳）、覚審大僧都に相従って法曼流の教えを受けたという。次いで穴太流の忠快に受法する。忠快については『阿婆縛抄』序「当流代々書籍事」の「山門真言三流事」に、

契中弟子大教房中納言忠快法印也。是ヨリ小川殿トハ申也。

小川法印ト申スハ是也。当流ヲ小川流ト云事是ヨリ始ル也。此

忠快法印ハ平家太政入道殿舎弟門脇宰相教盛卿子息也。即

能登殿舎弟也。東山三条小川ニ高島ト云在レ所有之。門脇宰

相屋敷也。仍関東ヨリ忠快御上洛之時。彼ニ御所ヲ立ラレテ御座間小川殿ト申也。彼御所ヲ宝算院ト申也。⁽¹²⁾今当室持仏堂地蔵薬師。彼小川御所本尊也。即院号モ其故也云々ニ尊ヲ並テ本尊トセラル、事ハ。薬師根本中堂御本尊ヲ模シ。地藏ハ十禅師権現本地也。何モ御信仰故也。

とあり、また、大島武好氏編『山城名勝志』巻之六に、⁽¹³⁾

宝菩提院 号ニ仏花林一在ニ寺戸村一○本尊如意輪慈覚大師作也世称ニ寺戸観音一

或云元在ニ東山三条小川高島一山門一流僧正承澄遷ニ此地一此処願徳寺地也云云小川始中納言平教盛卿領也其子中納言法印忠快自ニ関東一帰洛時此処立ニ住房一故号ニ小川殿一彼房号ニ宝菩提院一今安置薬師仏地藏菩薩像彼小川房本尊也忠快弟子承澄移ニ此地一故小川流号ニ西山流一今山門正覚院管領也○藤原系図承澄山僧正号ニ小川一関白師家公息或基房公息

と記されており、『尊卑分脈』もあわせて見ると、忠快（一一五九―一二二七）は門脇宰相とよばれた平教盛の四男で、能登守教経の弟にあたる。教盛は東山三条小川高島に邸を構えていたが、忠快は配流を許されて鎌倉から帰洛し、その邸内に宝菩提院を建て持仏堂としていた。それで忠快を小川殿とも、小川法

印ともいのである。承澄は後をおそつてここにあり、小川僧正とよばれた。また、承澄が入室してこれを西山の地へ移転させたのである。仁治年間（一二四〇）以降、大半をこの所で過ごし、この地でなくなったのだらう。仁治・寛元・宝治・建長年間には精力的に『阿婆縛抄』の撰述にあたり、前後三回にわたり尊澄らと鎌倉におもむいてもいる。『天台座主記』⁽¹⁴⁾に、

同（正嘉元年）十一月卅日以法印承澄拳補楞嚴院長吏聖增僧正
辭退替⁽¹⁵⁾とあり、『僧官補任』「楞嚴院檢校次第。号「長吏」。」に、

承澄法印 西忍辱房。正嘉元年十二月日宣下。天王寺入道撰政息。文応二正月辭退。忠快法印弟子。

と記されるところから、正嘉元年（一二五七）十一月三十日、横川の長吏に拳補され、文応二年（一二六一）正月に辞していることがわかる。また、『阿婆縛抄』序「阿婆縛抄現在目錄（治定目錄）」の本奥書に、

文永十二年二月日 僧正承澄

と、はじめて「僧正承澄」という記述が現れることから、次いで文永の末年に僧正に補せられたとみられる。承澄は没する直前まで書き加えや書き改めをおこなっている。

つまるところ、現在知られる承澄の伝記は、清水谷恭順氏の『天台の密教』⁽¹⁶⁾に、

小川、西山、黒谷流、穴太の聖昭より、常寂房契中を経て、小川オカワ法印忠快に至つて、小川流の名を生ず、その資に小川ノ僧正承澄が出た、師は十一歳の時出家して忠快到師事し、覺審に従つて法曼流をも受け、絵画に巧妙であつたそうである、博覽強記なれば諸流に通じ、著作としては、阿婆縛抄二百二十八卷、明匠略伝三卷、画には韋駄天馬等がある、弘安五年（西暦一二八二）寿七十八で入滅せられた。と見られるように、「三国明匠略記」や「当流代々書籍事」といった『阿婆縛抄』に記述される域を出るものではなく、現行の辞書類もすべてこれらを徴証としている。⁽¹⁷⁾ 今後は、承澄の著作活動や印信・血脈などを踏まえた研究が必要となってくる。

切畑氏は論考の中で、従来いわれている小川僧正承澄の撰であると、単に言いきれないと述べ、全体の構成は承澄によってたてられたが、中には承澄配下の尊澄、澄豪などの起草によるものが含まれており、彼らも積極的にこれに参加したとしている。また、爾然という、承澄の晩年から没後にかけて『阿婆縛抄』を書写した僧のうちの一人を、成立に重要な役割を果たしたとし、撰述の要員に含めている。さらに、尊澄については『尊卑分脈』から承澄と兄弟関係にあった可能性を指摘している。

切畑氏のこの説を受けて宮島氏は、兄弟説の可能性を認めつ

つ、『阿婆縛抄』の本奥書の解釈から撰者を尊澄とし、『阿婆縛抄』の成立に尊澄が根本的役割を果たしている。従来撰者と目されてきた承澄が果たした役割は、むしろ増補や転写であるとし、文永二年（一二六五）の「別行之目録」から承澄撰述なる諸本を除いた尊澄による最初の『阿婆縛抄』清書本は一六五巻ほどになり、現行の二二八巻はかなり増補された段階を示すものであるとしている。

これらの考察は、成立年代の問題に関わってくる。従来の諸説ではいずれも撰者を承澄とし、どの段階を完成と捉えるかで成立年代に異同が見られる。切畑氏は奥書の年記により成立時期を大きく四期（仁治・寛元年間、宝治・建長年間、文永・建治年間、弘安年間）に分け、仁治三年（一二四二）から弘安七年（一二八四）にわたって著されたとする。従来説に比べやや広くとるのは三河の僧爾然を撰者に含むためである。

対して宮島氏は、起稿から完成、さらに再治・増補という過程を想定し、撰者を尊澄と捉えることにより、成立時期についても、起草の年は曼殊院本『阿婆縛抄』巻第七九「摩利支天法」の出現によって仁治二年（一二四二）卯月八日と一年上げ、清書終了の年も正元元年（一二五九）十月と従前の説よりかなり早くとらえている。ただし、これは尊澄による最初の清書本の

成立年次であり、以降増補や再治、転写が行われていくのである。

なお、切畑氏は論考に、『阿婆縛抄』各巻の奥書をその年記の順に配列した「阿婆縛抄年表」を、宮島氏も同じく論考に「曼殊院本『阿婆縛抄』各巻奥書一覧」を付している。

また、美術研究の視点による両人の論述を付言しておくこと次のようになる。小野玄妙氏に、⁽¹⁸⁾

阿婆縛抄の中の図像は、果して承澄僧正のものであるかどうかと云ふことに多少ながら疑を存する余地のあることは事実であるやうに思はれる。

といわれるように、美術史学では、仏画研究・図像学的観点において、早くから『阿婆縛抄』は着目され、その本格的な研究が待たれていた。切畑氏はこの説を受けて、承澄が絵を画かなかったとはあながちに否定はできないとし、その可能性について考察している。一方、宮島氏は、曼殊院本『阿婆縛抄』により、従来の写本には掲載されていない「放光菩薩」の図像を知ることができたことなどを成果とし、図像集としての主要な引用書物は、台密法曼流の戒光房静然（平安後期、生没年未詳）の著述になる『行林抄』と、東密の平等房永嚴（一〇七五—一五二）の『十巻抄』であるとし、⁽¹⁹⁾図像に若干の考察を加えて

いる。

さて、伝本調査に基づく切畑氏・宮島氏の研究を踏まえて、大久保良峻氏は『日本仏教の文献ガイド』に『阿婆縛抄』に関して現在知られるところを概説している。⁽²⁰⁾ 整理すると次のようになる。

・これまで『阿婆縛抄』の撰者は承澄だとされてきたが、原撰者は、承澄の弟子にあたる尊澄であり、のちに師の承澄が再治・増補を行った。

・巻数は、承澄の「治定目録」による二二八巻説や二三七巻説、あるいは『大日本仏教全書』の「阿婆縛抄総目并諸本存欠一覧」による二三三巻説といったように、一定ではない。

・成立年代についても、撰者の捉え方によって説がわかれる。撰者を承澄と考えた場合、仁治三年（一二四二）から弘安七年（一二八四）の間となり、撰者を尊澄とする場合、仁治二年（一二四一）から正元元年（一二五九）の間で、のちに承澄の再治・増補が入ったと見なす。

また、大久保氏は「七仏薬師法」「熾盛光法」といった諸尊法などにも触れている。これまで『阿婆縛抄』は図像が収められているところから美術研究の分野で取り扱われてきたが、大久

保氏によってようやく密教学の視点から研究が行われるに至ったといえる。

近年では、伝本研究を進めた松本公一氏の論考が提出されている。⁽²¹⁾ 松本氏の論考によれば、『阿婆縛抄』の奥書にみる僧を大きく四つにわけると、

1、小川流の僧侶―忠快にはじまる流派で、承澄・尊澄・澄春・良含など。

2、西山流の僧侶―承澄の弟子の澄豪にはじまり、豪鎮・巖豪・豪喜など。

3、黒谷流の僧侶―恵鎮など（恵鎮は法脈上は西山流の澄豪の弟子にあたる）。

4、地方における書写をおこなった僧侶―爾然・本寂など。となり、その中でも4について、とくに東海地方（三河・尾張・美濃）での書写が多いことを指摘し、この東海地方における書写にかかわった僧侶と場所について書写年代順に整理している。

また、松本氏は、一巻一巻伝わったのではなく、ある程度まとまったものとして伝わる『阿婆縛抄』の中世の写本は以下のとおりであると述べている。

①京都・曼殊院本 八十四卷 旧金剛輪寺蔵本

②鎌倉・宝戒寺本 七卷

③滋賀・成菩提院本 七十五卷カ

④滋賀・叡山真如藏本 十三卷

⑤滋賀・叡山天海藏本 七十九卷

⑥岐阜・華嚴寺本 卷数未詳

松本氏は、各寺院における『阿婆縛抄』の受容や入手経緯といった、中世における『阿婆縛抄』に対する意識や書写のネットワークのようなものに主眼を置き、先に挙げたうち、②鎌倉・宝戒寺、③滋賀・成菩提院に蔵される『阿婆縛抄』諸本の奥書を検討すること、で、『阿婆縛抄』は原則として西山流の中でのみ伝えられたテキストであり、これらの書写には「許可」、「免許」といったものが必要であったと述べている。

松本氏が指摘するように、『阿婆縛抄』には西山流の僧侶によって伝えられてきたものが少なくない。例えば、『阿婆縛抄』巻第一「胎灌記本」の奥書を見ると、そこには、西山流の二代豪鎮を始めとし、嚴豪、豪喜、豪宗、豪祝と歴代の嫡流が名を連ねていることが見て取れる。現在確認されている『阿婆縛抄』諸本が西山流⁽²²⁾において伝受されてきたことから、『阿婆縛抄』は西山流研究⁽²²⁾において考察が進められてきたのである。

『阿婆縛抄』の研究の現状は、撰者や巻数、成立年代といっ

た基礎的な事柄でさえ十分に理解されていない。その理由はいくつか考えられるが、書写年代が原本に近い中世にさかのぼるような古写本に恵まれていないこと、原本の全貌を伝える後代の完好な写本が残されていないこと（現行のものは、諸本の残巻や零巻を雑多に収集した取り合わせ本である）、本書を図像集とみた場合『覚禪鈔』などと比較すると収録数や台密独自のものが少ないこと、また、各地において中世にさかのぼる写本の調査自体が充分になされていないことなどが宮島氏や松本氏によって指摘されている。

大久保氏によって本来問題とされるべき『阿婆縛抄』における密教に関する考察がわずかに提言されたものの、いまだ『阿婆縛抄』の編纂を裏付ける密教の相承については解明されるに至っていない。近年における松本氏の研究も、松本氏自身が確認された『阿婆縛抄』諸本の奥書から『阿婆縛抄』の享受を問題とする。切畑氏や宮島氏の論考につづく『阿婆縛抄』の編纂をめぐる問題は、今後『阿婆縛抄』に類聚された諸説を検討することによって進めていかなければならない。ただし、『阿婆縛抄』における伝本調査ははじまったばかりであり、どのテキストを底本として研究を進めていくかも定まっていない状況にある。台密を伝えるテキストの多くが公刊されていない現在、

『阿婆縛抄』に限らず、伝本調査を基としつつ、テキストの読解を進めていく必要がある。

真言密教を伝える『覚禪鈔』に関する研究は、仏画研究・図像学的観点による美術史研究、密教学を中心とした教理研究、古代史・中世史といった日本史研究、文学研究、建築史研究と様々な視点から行われてきた。⁽²³⁾『阿婆縛抄』の研究もまた『覚禪鈔』と同様に多岐にわたった視点に基づく研究がなされていくことが期待される。

註

- (1) 以下『阿婆縛抄』の引用は『大正新脩大藏經』(図像・第八卷、大蔵出版、昭和九年一月／図像・第九卷、大蔵出版、昭和九年三月)所収のものによる。底本は、滋賀叡山文庫天海蔵本、同毘沙門堂蔵本、東京浅草寺文庫蔵本を使用し、『大日本仏教全書』所収の『阿婆縛抄』を校本に用いている。

(2) 『大日本仏教全書』は、

- a 仏書刊行会が編纂し、仏書刊行会から発行されたものの

- b 財団法人鈴木学術財団が編集し、講談社から発売さ

れたもの

- c aを主底本に一部修正を加え、仏書刊行会が編纂し、名著普及会から発行されたもの

の三版を確認した。以下『大日本仏教全書』からの引用は、特に異同がない場合、a所収のものによる。

- (3) 仏書刊行会編『大日本仏教全書』第四十一冊「阿婆縛抄第七」、仏書刊行会、大正三年四月所収

- (4) 仏書刊行会編『大日本仏教全書』第二冊「仏教書籍目録第二」、仏書刊行会、大正三年一月所収

- (5) 仏書刊行会編『大日本仏教全書』第三十四冊「自在金剛集」、仏書刊行会、大正六年六月

- (6) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第一卷「阿婆縛抄」の項、吉川弘文館、昭和五十四年三月

- (7) 切畑健氏「阿婆縛抄―その成立と撰者承澄―」(『仏教芸術』七〇、昭和四十四年三月)

- (8) 宮島新一氏「『阿婆縛抄』をめぐる二、三の問題―曼殊院本を中心にして―」(『仏教芸術』一二二、昭和五十二年五月)

- (9) 註(4) 前掲

- (10) 福田堯穎氏『天台学概論』、文一出版、昭和二十九年八月

- (11) 黑板勝美氏・國史大系編修会編『新訂國史大系』第五十八卷、吉川弘文館、昭和三十二年五月第一版第一刷、平成十三年一月新装版所収

- (12) 『大日本仏教全書』本では「宝菩提院」とある。切畑氏は、菩提を「苺」と書いたのを、いつの頃か「算」の草体と読み違えたのではないだろうか。
- と指摘している。

- (13) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書』第十三卷、臨川書店、昭和四十三年六月所収

- (14) 『天台座主記』は、『仏書解説大辞典』（小野玄妙氏編『仏書解説大辞典』第八卷、大東出版社、昭和九年十月、「天台座主記」の項の執筆者は石井亮薫氏）に、

記事の存欠と代数の取り方の多少とは、各々其の製作者が其の系統を異にするに由るものであつて、一説に叡山には各谷毎に異なる座主記を持つと云はれてゐる。

とあるように、諸本間に編集形式の違いや大きな出入りがみられる。当該の引用は、『続群書類従』補任部所収のものによる。

- (15) 『群書類従』補任部所収

- (16) 清水谷恭順氏『天台の密教』、山喜房、昭和四年十月
- (17) なお、管見に及んだ範囲では、以下の辞書に「承澄」の項目が挙がる。

『日本仏家人名辞書』（鷺尾順敬氏著『日本仏家人名辞書』、光融館、明治三十六年六月、明治四十四年十二月増訂再版）

『仏教大辞彙』（龍谷大学編『仏教大辞彙』第四卷、富山房、大正五年十二月初版、昭和四十九年三月再版）

『密教大辞典』（密教辞典編纂会編〔種智院大学密教学会内密教大辞典再刊委員会・増訂版編〕『密教大辞典』増訂版第三卷、法蔵館、昭和六年九月第一刷、昭和四十四年六月増訂第一刷）

『望月仏教大辞典』（塚本善隆〔代表〕編『望月仏教大辞典』第三卷、世界聖典刊行協会、昭和十一年十一月初版、昭和三十二年三月増訂版）

『日本仏教人名辞典』（日本仏教人名辞典編纂委員会編『日本仏教人名辞典』、法蔵館、一九九二年一月）

『総合仏教大辞典』（総合仏教大辞典編集委員会編『総合仏教大辞典』、法蔵館、二〇〇五年二月）

- (18) 小野玄妙氏「苗本仏像雜記」（『小野玄妙佛教藝術著作集』）

〔第十卷〕佛教の美術と歴史〔下〕、開明書院、昭和五十二年六月——ただし本書は大正十二年二月に大蔵出版から発行された『佛教の美術と歴史』の覆刻版である〕

- (19) 吉山亮薫氏『天台美術史序説』（教育新潮社、一九六七年一二月）においても、

『阿婆縛抄』の図像は東密広沢流正嫡の図像研究を全分的に参考としている

と注意している。

- (20) 大久保良峻氏「阿婆縛抄（あさばしょう）」（日本仏教研究会編『日本仏教の文献ガイド』、法蔵館、二〇〇一年一月）

- (21) 松本公一氏「『阿婆縛抄』書写奥書についての覚書―東海地方における寺院と僧侶を中心に―」（『國書・逸文の研究』、平成十三年十二月）

松本公一氏「『阿婆縛抄』の書写奥書について―滋賀成菩提院蔵本にみる教学の伝授と集積―」（河音能平氏・福田榮次郎氏編『延暦寺と中世社会』、法蔵館、平成十六年六月）

松本公一氏「『阿婆縛抄』の書写と伝播―成菩提院本の歴史的位置―」（『仏教文学』第三十号、平成十八年三月）

- (22) 西山流の研究に関するものとして、以下のようなものがある。

獅子王円信氏「台密西山流雑考」（叡山学会編『叡山学報』

第一分冊、同朋社、一九七九年五月覆刻版）

稲田祖賢氏「台密諸流史私考」（叡山学会編『叡山学報』

第一分冊、同朋社、一九七九年五月覆刻版）

稲田祖賢氏「台密諸流史私考（承前）」（叡山学会編『叡山学報』

第一分冊、同朋社、一九七九年五月覆刻版）

稲田祖賢氏「台密諸流史私考（完結）」（叡山学会編『叡山学報』

第二分冊、同朋社、一九七九年五月覆刻版）

尾上寛仲氏「台密西山流―成菩提院灌室の成立について」

（『印度学仏教学研究』第二十五卷第二号〔通巻第五〇号〕、昭和五二年三月）

松本公一氏「西山流宝菩提院沿革考―その堂舎と僧侶・典籍―」（笠井昌昭氏編『文化史学の挑戦』、思文閣出版、二〇〇五年三月）

大久保良峻氏「台密諸流の形成」（福井文雅博士古稀・退職記念論集刊行会編『福井文雅博士古稀記念論集 アジア文化の思想と儀礼』、春秋社、二〇〇五年六月）

曾根原理氏・渡辺麻里子氏・大島薫氏・牧野和夫氏・松

本公一氏「天台談義所の学問と交流——成菩提院聖教を中心——」（『仏教文学』第三十号、平成十八年三月）

(23)

近年における『覚禅鈔』の研究成果としては、覚禅鈔研究会編『覚禅鈔の研究』（勸修寺善本影印集成第一期別冊、親王院堯榮文庫、平成十六年十二月）が挙げられる。これは同文庫より二〇〇〇年～二〇〇三年に刊行された、覚禅鈔研究会編『覚禅鈔』一～一四（勸修寺善本影印集成第一期）における解題篇として位置づけられるものであり、あわせて日本史学、美術史学、密教学といった分野の研究者による、広い視点での論文集となっている。また、原本調査によりまとめられた写本群の書誌的なデータが資料篇として付されている。

（おかだ けんた／本学大学院生）